「ぶんせき」執筆要領

本執筆要領は，原稿執筆の際の指針として作成されたものです．本誌最新号を参照のうえ，下記諸注意を守り，体裁の整った，読みやすく，理解しやすい原稿を脱稿期日までにお送りください．

［種類］

本誌は原則として依頼原稿を掲載します．本誌には，入門講座，解説，展望，講義，特集，ぶんせきの泉，話題，トピックス，分析化学のあゆみ，創案と開発，こんにちは，このひと，ミニファイル，技術紹介，博士論文要録，ロータリー，とびら，リレーエッセイなどの各欄があります．

各欄の内容及び執筆上の注意については，p.7 以降を参照してください．

［送付原稿］

① p.3 以降の原稿の書き方に従って執筆し，その電子ファイルを，入門講座，解説，展望，講義，ぶんせきの泉，話題，トピックス，分析化学のあゆみ，創案と開発，ミニファイル，技術紹介，特集，博士論文要録の場合は，ウェブ投稿システムから投稿してください．その他の欄の場合は，E-mail で編集委員会あてに送付してください．

② 執筆者のプロフィール及び著者の写真が必要な欄では，それらを添付してください（著者全員分）．

③ 主要な欄の原稿及び執筆者のプロフィールについてテンプレート（書式）が用意されているので，それらを利用してください．

［著者修正］

① 編集委員会では，閲読の結果，字句その他の加除修正を行い，あるいは執筆者にこれをお願いすることがあります．

② 原稿の修正は，指定期日までに対応してください．

③ 閲読とそれを受けての著者修正は，原則として 1 回に限って行います．

［著者校正］

① 1 回に限り行います．執筆者には校正刷だけをお送りしますので，原稿の控えにより校正してください．

② 校正刷は，指定期日までに返送してください．返送が遅れた場合は，編集委員会の校正のみで校了とします．

③ 著者校正の際の大幅な修正は，発行日に影響しますので御遠慮ください．

［別刷］

① 原稿投稿の際，該当欄に必要部数を必ず記入して申し込んでください．不要な場合にも 0 の記入をお願いします．

② 表紙付きで有料で作製します．ただし，分析化学のあゆみ，こんにちは欄については，50 部のみ贈呈します．

③ 50 部単位で，500 部まで作製します．それ以上ご希望の場合は事務局へお問い合わせください．

④ 価格（単位: 円）は，次式により算定しますが，原稿の種類によって変更する場合（技術紹介は次式対象外）もありますので，詳細につきましては，本会事務局へお問い合わせください．

$$3500 + 1400 \times P + 12 \times P\,(N-50)$$

ただし，P は印刷ページ数，N は作製部数です．

［著作権］

① 本誌に掲載された記事についての著作権は，公益社団法人日本分析化学会に帰属するものとします.

② 著作権が設定されている図・表，または元のままの文章などを利用する場合は，あらかじめ執筆者が著作権者（原著者，出版社など）に連絡して許可を得ておき，その旨を脚注，引用文献などで明確に示してください．ただし，批評，総説などのために，公正な慣行に合致し，かつ正当な範囲内であれば，あらかじめ許可がなくとも，出典を明確にしたうえで引用することはできます.

［原稿の送付・問い合わせ先］

原稿の送付，その他の問い合わせは，公益社団法人日本分析化学会「ぶんせき」編集委員会（電話：03-3490-3537，メール：bunseki@jsac.or.jp)）あてにお願いします.

原稿の書き方＝＝

1 題名

記事の内容を的確に示したものとし，依頼時の題名と大幅な変更のないようにする．また，普通名詞化したものを除き，原則として商品名及び略号を用いない．ただし，技術紹介記事はそのかぎりではない．

2 本文

2-1 原稿は，原則としてテンプレートを用いて作成する．

2-2 文章は，原則として平仮名書き，平易で簡潔な文章体（「である」式）とし，常用漢字と現代仮名遣いとを用いる．

2-3 大見出し，中見出し，小見出しなどは，1, 2, ... , 1-1, 1-2, ... , 1-1-1, 1-1-2, ... , (1), (2), ... , (a), (b), ... などとし，大見出し，中見出しの前は 1 行あける．

2-4 句読点，括弧は，1 字に数え，原稿の書き始め及び行を改めたときの書き始めは，1 字あける．なお，句読点には「．」「，」を用いる．

2-5 英数文字およびギリシャ文字は半角とする．

2-6 外国の人名，会社名などは，原則としてローマ字つづりで書き，周知の術語となっている人名などは片仮名書きとする．また，欧米語は，原則としてすべて小文字とする．ただし，固有名詞は大文字で書き始め，学名はイタリック体とする．

2-7 特殊な文字，書体，記号はできるだけ避ける．また，添字の添字は特別な理由のない限り避ける．

2-8 略号は，最初に出てくる箇所で正式名称の後に（）に入れた略号を付記する．

2-9 脚注は，原則として用いず括弧を用いて本文中に書く．やむを得ず用いる場合は，本文中その項目の右肩に *1 *2 を付け，そのページの下段に書く．

2-10 引用文献がある場合は，本文中その項目の右肩に 1) 2) のように，通し番号を付け，本文の最後に文献欄を設けまとめて書く．また，引用する人名は，原則として第一著者の姓のみを記し，敬称は付けない．その他を略して「……ら」とする．欄によってはこの限りではない．

2-11 図，表及び写真を使用する場合は，図 1，表 1，写真 1 などと本文中に明記し，本文中で挿入箇所を指定する．

2-12 構造式を使用する場合は，原則として〔I〕，〔II〕，〔III〕などと本文中に記し，本文中で挿入箇所を指定する．

2-13 図，表，写真各 1 枚は，目安として ，片段のおおよそ三分の一，500 字相当分とする．

3 文献

3-1 原則

3-1-1 文献番号は，単一の文献に対応するものとする．

3-1-2 同一の雑誌，単行本などを連続して引用する場合に，“同上”，“ ibid. ” は使用しない．

3-1-3 カンマ，ピリオド，コロンおよびスペースは半角を用いる．

3-1-4 著者名は，全員を記載し，著者が複数となる場合には，“, ”（半角カンマ＋半角スペース）で区切る．邦字人名の場合は姓のみでなく名も記し，欧字人名の場合は名前の頭文字，姓の順に書く．

3-1-5 投稿中の論文，私信，未発表データなどは，原則として重要な資料としては用いない．

3‐1‐6 大学，企業および個人の Web site の引用は極力控える．もし，引用した場合は URL のほか，Web site を作成している企業名，大学名などの情報もできるだけ記載する．また，引用したサイトを確認した最終年月日も記載する．

3‐2 雑誌掲載の文献を引用する場合

3‐2‐1 引用の様式は，次のとおりとする．

著者: 雑誌名（*英文名は斜体とする*），**巻（太字体とする）**，開始ページ（発行年）.

3‐2‐2 雑誌名は，Chemical Abstracts の略し方に従う．和文雑誌名は省略しない．“分析化学”及び“ぶんせき”については ( ) に入れた英文名を付記する．

1）宮川雅恵: 分析化学（*Bunseki Kagaku*), **43**, 57 (1994).

2）片山則昭，田村清一，田村紘基，古市隆三郎: 電気化学および工業物理化学, **62**, 251 (1994).

3）樋口精一郎，島田秀樹，田中誠之: 分析化学（*Bunseki Kagaku*), 印刷中.

4）A. Hulanicki: *Anal. Sci.*, **7** (supplement), 1405 (1991).

5）T. Tanaka, S. Kakuyama, A. Mizuike: *Anal. Sci.*, **10**, 389 (1994).

6）森定雄，森貴代: 日本分析化学会第 41 年会講演要旨集, p. 392 (1992).

7）K. Matsumoto, K. Fuwa: Abstracts of VI International Symposium on Solute-Solute-Solvent Interactions, p. 85 (1982), Osaka.

3‐2‐3 巻を設けていない雑誌については，発行年をもって巻に充てる．

8）小田嶋次勝: ぶんせき（*Bunseki*), **1988**, 608.

9）A. Hodinar, A. Jyo: *Chem. Lett.*, **1988**, 993.

3‐2‐4 ページ数がない雑誌については，論文番号を記すか，論文番号がない場合には末尾に DOI を付記する．

10）S. A. Mabon, T. Misteli: *PLoS Biol.*, **3**, e374 (2005).

11）H. M. Fritz, J. C. Borrero, C. E. Synolakis, J. Yoo: *Geophys. Res. Lett.*, **33** (2006). DOI: 10.1029/2006GL026784.

3‐3 単行本を引用する場合

3‐3‐1 引用の様式は，次のとおりとする．

著者: “単行本の名称”，第 0 巻, p. 引用開始ページ（発行年), (出版社，国外の出版社については所在都市名).

1）相島鐵郎: “ケモメトリックス”, p. 69 (1992), (丸善).

2）B. Magyar: “*Guide-Line to Planning Atomic Spectrometric Analysis* ”, p. 63 (1982), (Elsevier Sci. Pub., Amsterdam).

3‐3‐2 編集者がいる場合には，その編著者名も記載する．

3）内野栄治，都築俊文: “水の分析”，第 4 版，日本分析化学会北海道支部編, p. 445 (1994), (化学同人).

4）R. M. Measures: “*Analytical Laser Spectroscopy* ”, Edited by N. Omenetto, p. 362 (1979), (J. Wiley & Sons, New York).

3‐3‐3 単行本全体を引用する場合の様式は，次のとおりとする．

編著者: “単行本の名称”，第 0 巻(発行年), (出版社，国外の出版社については所在都市名).

5）日本分析化学会北海道支部編: “水の分析”，第 4 版, (1994), (化学同人).

6）N. Omenetto (Ed.): “*Analytical Laser Spectroscopy*”, (1979), (J. Wiley & Sons, New York).

3·3·4 翻訳書の場合は，これを引用した後，セミコロンで続けて原著書を引用する．

7）辻内順平訳: “フーリエ変換とその工学への応用”, p. 81 (1977), (共立出版); P. M. Diffieux: “*L'Integrale de Fourieret ses Applications a l'Optique*”, (1970), (Masson et Cie, Paris).

3·4 その他（特許公報，日本産業規格 JIS，日本産業規格 JIS，公報・告示，Web サイトなど）

3·4·1 特許に関して引用できるのは，特許出願公開番号（特開）または特許番号（特許）を取得したもののみとする．出願番号（特願）は引用文献とはしない．引用の様式は次のとおりとし，外国特許の場合は，番号の前に 2 文字の国名コードを追記する．

特許権者（出願人）1, 特許権者（出願人）2: 発明者 1, 発明者 2, 公開特許公報または特許公報の番号, “発明の名称” (年月日).

1）産業技術総合研究所: 津越敬寿, 三島有二, 特許 6649651, “質量分析方法” (2020. 1. 21).

2）共立理化学研究所: 村居景太, 奥村浩, 岡内俊太郎, 特開 2017-173018, “試料液中のヒ素の分析方法” (2017. 9. 28).

3）Dow Chemical Co.: T. M. Stevens, T. E. Miller, Jr, US 4290775, “Analytical method for determining acid/salt and base/salt species concentration in solution” (1981. 9. 22).

3·4·2 日本産業規格 JIS，公報・告示，Web サイトなどを引用する場合の様式は，次のとおりとする．

4）JIS K 0102, 工場排水試験方法 (2019).

5）JIS G 1215-1, 鉄及び鋼−硫黄定量方法− 第 1 部: 鉄分離硫酸バリウム重量法 (2010).

6）ASTM E 169-63, General Techniques of Ultraviolet Quantitative Analysis (1963).

7）厚生労働省：平成 15 年厚生労働省告示第 261 号, ”水質基準に関する省令の規定に基づき厚生労働大臣が定める方法” (2003).

8）国土交通省建築指導課：”ホルムアルデヒド発散建築材料の審査方法について(平成 15 年 6 月 26 日)” (2003).

9) 環境省：”水銀廃棄物ガイドライン第 3 版（令和 3 年 3 月)” <https://www.env.go.jp/recycle/waste/mercury-disposal/>, (accessed 2022. 1. 23).

10) International Federation of Library Assoc. and Inst.: “Resources and project”, IFLANET, available from <http://www.ifla.org/II/html>, (accessed 1999. 11. 30).

11) U.S. National Library of Medicine, National Institutes of Health, Health & Human Services: “ChemID plus Advanced” <https://chem.nlm.nih.gov/chemidplus/>, (accessed 2021. 11. 30).

4 表

4·1 表題，説明などは，すべて日本語とし，よく整理して分かりやすく書く．

4·2 脚注は， *1 *2 などを用いて表の下に書く．

4·3 本文原稿とは別にまとめる．

5 図，構造式

5·1 表題，説明などは，すべて日本語とし，図面原稿の図の下に書き入れる．

5·2 明りょう, 正確で, 完全なものを作成する（やむを得ずコピーを使用する場合は, 図柄中の欧米語を日本語に直す）．

5·3 図の大きさは，片段（7.5 cm），全段（15 cm）以内とし紙面に掲載のサイズでの作成が望ましい．

5·4 図柄中の記号は，なるべく簡単なものを用いる．

5·5 図の縦軸，横軸の目盛りの数値の説明は，原則として「物理量 / 単位」のように表記する．

5·6 本文原稿とは別にまとめる．

6 写真

6·1 表題，説明などは，すべて日本語とし，写真の下に書き入れる．

6·2 白黒で，コントラストの鮮明なものが望ましい．

6·3 本文原稿とは別にまとめる．

7 専門用語

最新の "学術用語集化学編"（文部省）または "分析化学用語集"（日本分析化学会編）参照.

8 化合物名

8·1 原則として IUPAC 命名法に従い日本語で書く．ただし，誤解のおそれがなく，理解しやすい場合には，元素記号，化学式を用いても差し支えないが，その際は一原稿中で統一する．

8·2 最新の "化合物命名法"（日本化学会標準化専門委員会化合物命名小委員会編）参照.

9 物理量の記号，単位，数と数式

9·1 物理量の記号及びその使用上の規約は，なるべく IUPAC の勧告に従い，慣用のものでも最初に出てくる箇所でその定義を明示する．

9·2 単位は，できるかぎり国際単位系（SI）を用いる．

9·3 数式は，本文文章中では (a+b)/(c+d) のように書く．ただし，式だけを別行に書く場合は,

$$\frac{a+b}{c+d}$$

のような記載も可能とする．

9·4 物理量，単位，数及び数式については，最新の "「分析化学」投稿の手引き付記 A2 及び A3"並びに "「物理・化学量及び単位」に関する記号と術語の手引"（日本化学会標準化専門委員会編）を参照.

各欄の内容及び執筆上の注意＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【入門講座】 12000 字以内（図，表などを含む）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール＆写真要〉

内容：初級の分析関係者に必要な基本原理，正しい分析技術の普及を目的とする．分析関係者が従来から利用している，または最近普及した分析技術（分析法，分析機器）の基礎的原理を分かりやすく，教育的に取り扱ったもの．

執筆上の注意

① 文献を引用しなくても，本講座のみで充分に理解できるようにする．

② 内容の理解を助けるために，図や写真などを積極的に取り入れる．

③ 更に高度の知識を求める読者のために，末尾にまとめて参考書，基本文献を紹介することは差し支えない．ただし，内容が平易で入手しやすいものが望ましい．

【解説】 12000 字以内（図，表などを含む）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール＆写真要〉

内容：分析関係者を対象とし，分析化学の各分野において実用化されている，最近の分析の理論，技術の紹介を目的とし，原理，装置，操作及び応用などを実際的に述べたもの．

執筆上の注意

① テキスト的な記述でなく，その方法の特徴，長所，短所及び適用範囲などについて，焦点を絞って記述する．

② 具体的な応用例を示して，実際に役立つような内容とする．そのため，できるだけ多く図や表を用いて，理解しやすく記述する．

③ 引用文献は，代表的なものにとどめる．

④ 本文ファイル内に 200 字程度の要旨を付ける．要旨内では改行しない．また，図，表，文献などを引用しない．

【展望】 12000 字以内（図，表などを含む）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール＆写真要〉

内容：将来の分析化学，分析技術の方向を示唆するもので，主として分析方法，分析機器，分析対象などを中心に自由な立場で述べたもの．

執筆上の注意

① 現状は 1/3 程度にして，できるだけ将来を指向したものとする．

② 会員の分析化学に対する取り組み姿勢が啓もうされるよう，配慮する．

③ できれば，将来方向などを図解するようにする．

④ 本文ファイル内に 200 字程度の要旨を付ける．要旨内では改行しない．また，図，表，文献などを引用しない．

【講義】 12000 字以内（図，表などを含む）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール＆写真要〉

内容：分析関係者に必要な関連分野の知識の紹介を目的とする．分析関係者が専門以外の分野と接触するにあたり，相互の正確な理解を助けるのに必要な知識を平易に述べたもの．あるいは，分析化学，分析技術の進歩発展に役立つ関連分野を紹介したもの．

執筆上の注意

① 読者が分析関係者であり，記述内容に関して予備知識がないことを前提にして，平易に述べる．

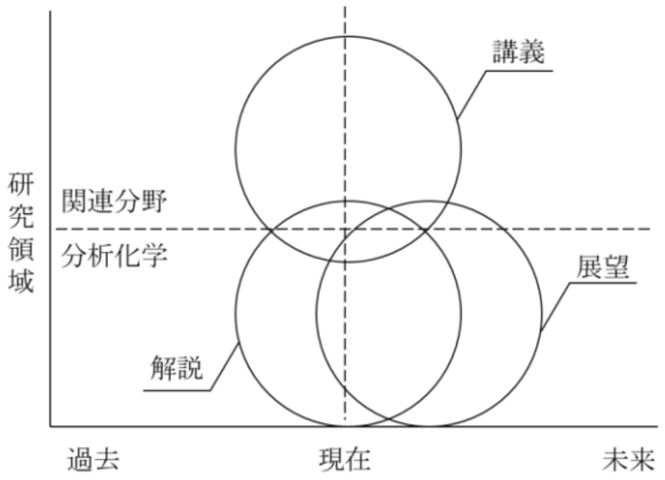
② 記述された分野の初歩的入門書，研究会があればその連絡先，特殊な試薬，器具などはその入手先などを付記する．

③ 引用文献を参照しなくても，本文だけで概要を理解できるように，図や写真などを用いて，詳しく記述する．

④ 本文ファイル内に 200 字程度の要旨を付ける．要旨内では改行しない．また，図，表，文献などを引用しない．

《参考》

☆解説，展望，講義の相互の関係



【特集】 8000 字程度（図，表などを含む）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール＆写真要〉

内容：編集委員会の定めた特集テーマに沿って，その分野の最近の潮流について主に応用分野に重点を置いて述べたもの．

【ぶんせきの泉】 4000~12000 字（図，表などを含む）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール＆写真要〉

内容：入門講座，解説，展望，講義のいずれにも属さない記事で，分析化学を研究，活用していくうえで役立つであろう，周辺の科学についての解説記事を中心とする．

《ぶんせき Q&A》本欄の中で，周辺領域で発生する分析ニーズやトピックスをその領域の研究者・技術者の方々と本会員が共著で Q&A 形式でつづる．

【話題】 4000 字以内（図，表などを含む）（刷り上がり 2 ページ）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール＆写真要〉

内容：会員に分析化学，分析技術及びその関連分野の話題を提供するもので，分析に関係ある技術，化合物，装置，公的な基準や標準に関する記事，また，それらに関連する提案，時評的な記事を分かりやすく述べたもの．取り上げる記事は査読付き論文に限定しないが，機関誌にふさわしいものとする．

執筆上の注意

① 広い読者を対象とするので，用語，略語などは分かりやすく記述すること．

② 啓もう的であること．

③ 図や表は適宜用いてもよい．

④ 執筆者自身の研究紹介の場としない．

【トピックス】 1000 字以内（図，表などを含む）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール要〉

内容：読者の関心を引くような，新しい分析化学，分析技術の研究を短くまとめたもの．

執筆上の注意

① 新分析法の説明には，簡単な原理図などを積極的に取り入れる．

② 中心となる文献は，原則として 2 年以内の査読付き論文とし，出所を明記する．

③ 執筆者自身の文献を紹介することは避ける．

《参考》

☆話題とトピックスとの関係

ともに執筆者自身の研究紹介の場としない．もし執筆者自身の既発表の研究の紹介をしたいときは，「創案と開発」欄を利用されたい．

トピックスは文献紹介である．

話題は単なる文献紹介ではなく，広義の分析化学及び関連分野において，文字どおり話題となりそうなものを選ぶ．

【分析化学のあゆみ】〈ウェブシステム投稿，執筆者プロフィール＆写真要〉

タイプ I： 8000 字程度（図，表などを含む），写真数枚

内容：長年携わってきた分析化学の仕事を，回想を交えて記述する．分析化学の理論，原理，装置などができたときの背景などを含めた記事とする．

タイプ II （温故知新）：8000~12000 字程度（図，写真，表などを含む）．

内容：分析化学的に重要な，理論，原理，装置及び方法論などについて，その黎明（誕生）から現在に至る発展の歴史的経緯を解説する記事とする．また，当該分野の今後の展望等，次世代の刺激となる記述を含むことが望ましい．

執筆上のお願い

単なる回想録にしない．

執筆者が携わってきた研究分野において，当該分野（領域）がどのような発展してきたかを総説的に解説する．（従っ

て，執筆者が研究に携わる以前の内容も積極的に執筆願いたい．）その際，マイルストーン，エポックメイキングとなった研究に関する文献等を積極的に引用する．ただし引用数は 50 を超えないこと．

当該分野の今後の展望等，次世代の刺激となる記述を含むことが望ましい．また，現在及び今後の展望に関する記述を含める場合は，執筆者の判断で，当該分野の研究者を共著者として加えてもよい．

【創案と開発】 4000~8000 字（図，表などを含む）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール＆写真要〉

内容：新しい方法，技術を創案したときの着想，新しい発見の切っ掛け，新装置開発上の苦心と問題点解決の経緯などを述べたもの．

執筆上の注意

① 会員の研究，技術生活に参考となるよう，体験をなるべく具体的に述べる．物語り風でもよい．

② 従来の方法や装置の問題点に触れ，記事中の創案，開発が有用であること，すなわち，主題の背景が理解できるようにする．

③ 図や表，当時のスケッチなどを用い，分かりやすく説明する．

《先端機器開発》本欄の中で，分析機器に関するオリジナルデバイスや器具，ソフトウエアなどの開発成当事者が，そのブレークスルーなどに関わるエピソードや秘話を解説する．

【Ｉ＆Ｄ】 2000 字以内（図，表などを含む）（刷り上がり 1 ページ）〈ウェブシステム投稿，執筆者プロフィール要〉

内容：研究上のアイディアや実験上の工夫を簡潔にまとめたもの．

【こんにちは】 4000 字程度（図，表などを含む），写真数枚〈メール投稿〉

内容：研究所，研究室などの活動状況（人材の養成，研究テーマの選定，他部門との関連など）を客観的な立場で取材する．ただし，パンフレット的でない記事とする．

【ミニファイル】 4000 字以内（刷り上がり 2 ページ以内）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール要〉

内容：分析関係者に必要な基本的知識などをまとめ，シリーズとして紹介したもの．まとめてファイルし，小辞典として役に立つような記事とする．

【技術紹介】 12000 字以内（図，表などを含む）〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール＆写真要〉

内容：企業が保有する独自の技術や装置の特長，開発経緯，性能，応用などを科学的根拠に基づいて論じたもの．会員に対して，技術や装置の導入，または，これらの利用の契機となるような情報提供を目的とする．

① 分析機器の特徴や性能および機器開発に関わる技術

② 分析手法の特徴および手法開発に関わる技術

③ 分析機器および分析手法の応用例

④ 分析に必要となる試薬や水および雰囲気などに関する情報・解説

⑤ 前処理や試料の取扱い等に関する情報・解説・注意事項

⑥ 分析機器の性能を十分に引き出すために有用な情報など

執筆上の注意

① 必ずしも新規の技術や装置である必要はなく，既存の技術や装置に関わるものでもよい。社会的要求が高い内容は，データの追加などで繰り返し紹介しても構わない．

② 製品を開発した経緯や測定法を開発する重要性など，背景を一番初めの項に記載すること．

③ 著作権が設定されている図・表，または元のままの文章などを利用する場合について，執筆要領の［著作権］②に基づいて適切に対応すること．

④ 保有する技術や装置の特長または性能を科学的に説明していること．

⑤ 保有する技術や装置の優位性を論じるために，比較対象を否定・貶めるような表現は避けること．

⑥ 本文の構成要素として，「技術や装置の紹介・特長・優位性」，「その根拠となるデータ」，「考察」などが含まれていること（上記のカッコ書きは，各項の名称として求めるものではない）．

⑦ 専門用語は，最新の「学術用語集化学編（文部科学省）」または「分析化学用語集（日本分析化学会編）」を参照すること．

⑧ 製品名（商標名）は，使用しても構わない．

⑨ 200 字程度の要旨を別ファイルで作成すること（投稿システムの要旨欄入力用）．要旨内では改行しない．また，図，表，文献などを引用しない．

【博士論文要録】原則として 4000 字以内（刷り上がり 2 ページ以内，英文要旨 200 語程度を含む）．ただし，編集委員会で認められた場合には，最大 4 ページまで増やせるものとする．〈ウェブシステム投稿，原稿テンプレート有〉

内容：分析化学及びその関連分野に関する学位論文を簡潔にまとめたもの．詳しくはぶんせき誌ＨＰの「執筆の手引き」ページより「『博士論文要録』執筆の手引き」を参照のこと．

【とびら】 1200 字程度，顔写真 1 枚（刷り上がり 1 ページ）〈メール投稿，執筆者プロフィール＆写真要〉

「とびら」の執筆者は下記を慣例とする．

巻頭言: 本会会長, 2 号：関東支部, 3 号: 北海道支部, 4 号: 近畿支部, 5 号: 東北支部, 6 号:「分析化学」編集委員会, 7 号: 中部支部, 8 号:「Analytical Sciences」編集委員会, 10 号: 中国四国支部, 11 号: 九州支部, 12 号:「ぶんせき」編集委員会関係とする．

なお，9 号は編集委員会において適宜依頼する．

【このひと】略歴: 230~250 字，本文: 1300~1500 字，上半身写真 1 枚〈メール投稿〉

内容：略歴，その人の持論，友人の人物評などを加えながら，その人の考え方やたどってきた道などを記述する．

【ロータリー】 1200~2400 字（ただし，掲示板は 400 字以内）〈メール投稿，原稿テンプレート有（談話室のみ），執筆者プロフィール要（談話室のみ）〉

内容

視点・談話室：分析化学，分析方法・技術，本会事業（会誌，各種会合など）に関する提案，意見，質問などを自由な立場で記述したもの．

Q&A：実際に分析を行っている現場等での分析法や分析技術に関する質問とその回答．

インフォメーション：支部関係行事，研究懇談会，国際会議，分析化学に関連する各種会合の報告，分析化学に関するニュースなどを簡潔にまとめたもの．

掲示板：分析化学に関連する他学協会，国公立機関の主催する講習会，シンポジウムなどの予告・お知らせを要約したもの．

執筆上の注意（Q&A は除く）

① 図・文献は，原則として使用しない．表は，必要最小限にとどめる．

② インフォメーションは，要点のみを記述する．

【リレーエッセイ】 2000 字（図，表などを含む）〈メール投稿，原稿テンプレート有，執筆者プロフィール要〉

内容：本会会員がリレー形式で毎号交代しながら，自己紹介などの記事を執筆したもの．執筆する内容には，原則，制限は設けない．執筆者は，次号の執筆者を紹介する．

1974 年 5 月制定

1986 年 8 月改訂

1992 年 1 月改訂

2000 年 2 月改訂

2008 年 7 月改訂

2019 年 10 月改訂

2022 年 2 月改訂

2025 年 3 月改訂